

Ⅲ

団員レポート



知野 修司

落部スポーツクラブ
クラブマネージャー

はじめに

総合型地域スポーツクラブに携わる中で、ドイツがその先進地であること、また20年前のドイツ観光旅行の際に見たサッカー場の灯りがスポーツクラブの活動であったことを知り、クラブのマネージャーとして活動していたときは常に頭の隅に、憧れのドイツのスポーツクラブを見てみたい気持ちがあった。

ドイツのスポーツクラブは100年以上の歴史があり、クラブハウスが交流の場になっていると聞き、どのようなシステムで運営されているのか、参加している人々やクラブハウスをこの目で見て、ドイツのスポーツクラブの素晴らしさを地域のクラブだけでなく管内及び全道の仲間に報告したいと、ビデオカメラを購入して参加した。

ドイツ研修に参加して

○ドイツのスポーツクラブの歴史と現状

長い歴史に培われたドイツのスポーツクラブは、法律にも保障され、地域を中心に広まっており、100年以上の歴史と伝統を持つクラブがあるなど、ドイツ国民のスポーツの普及と発展に尽くしてきた。

ドイツには、約8万のスポーツクラブがあり、地域の公益性を重視して活動している。スポーツを生活の一部として楽しんでおり、スポーツクラブの多くは非営利法人で会員が自主的に活動し、会員の自由意思に基づいて運営している。また、各自の余暇時間を活用してスポーツクラブの運営や指導に当たるボランティアの存在が大変重要な意味を持ち、ボランティアがドイツのスポーツクラブの柱となっていた。そして、活動の拠点であるクラブハウスがあり、会員の社交の場にな



る等、地域の人々のコミュニティの場として非常に大きな役割を担っていた。

しかし、近年では学校の全日制に伴う若年層会員の減少、組織に属さず自由にスポーツを楽しむ人が増えて、クラブ離れの問題、つまり会員数の減少が起これ、それが財政面を圧迫してクラブ運営を難しくしている問題に直面しているクラブが増えているとのことだった。また、会員のスポーツへのニーズが多様化し、コースの設定、質の高いサービスの提供、運営に必要なボランティアの確保など多くの諸問題を抱えてもいた。ドイツのクラブは歴史と伝統があるだけに、諸問題に対し簡単に改革できない保守的な状況に苦慮していた。

そのように、深い歴史を持つドイツのクラブでも歴史の浅い日本のクラブと同様な問題を抱えていることに共感した。

○講義研修について

「ライン・ノイス郡のスポーツ」「スポーツクラブと小学校の連携」「自治体のスポーツ振興」「スポーツクラブの健康志向コース」「クラブマネジメント」「社会の発展とスポーツ」「ビジネスのためのクラブサービス」「学校とスポーツクラブについて」の8つの内容で、それぞれドイツでの専門家

に講義をいただき、大変有意義なものであった。

講義の中で強く感じた3点について報告する。

(1) ライン・ノイス郡のスポーツシステムについて

スポーツクラブの会員と郡、市町村、そして大学が連携して、それぞれのスポーツクラブの運営に対する支援体制ができていた。公益性を重視したスポーツクラブへの市民の要求、ボランティア及び指導者の育成、健康に関する情報等の提供等、スポーツクラブ、行政、大学の連携による支援体制ができており、このシステムは、諸問題を抱えている日本のスポーツクラブに大いに参考になると思った。

(2) ドイツの学校システムとスポーツクラブ

ドイツの学校システムは、学力向上や家庭環境の変化で、近年半日制から全日制に変わりつつあり、その影響で子どもたちのクラブに入る数が減少しているとのことだった。これは、子どもたちが午後学校に留まり、スポーツクラブで活動する時間が制限されているためである。この状況を踏まえ、スポーツクラブは積極的に学校に働きかけて、クラブへの加入率の向上を狙って学校カリキュラムへの参画などを図っていた。例えば、学校カリキュラムのスポーツに関する教科をスポーツクラブが指導する方法などである。これは日本の学校のクラブ活動にも非常に参考になると考える。

(3) スポーツクラブの健康志向

ドイツでも人口の高齢化に伴い、スポーツクラブでは健康志向のプログラムの提供が多くなってきているとのことであった。これらの健康志向のプログラムは、医者、理学療法士、保険会社などと連携して提供されていることは、大変有意義なことだと感じた。ドイツのプログラムは医療費などの社会的なコストの削減を進めるものであり、クラブの将来性を高めるためにも非常に重要なプログラムであると理解できた。

世界一の長寿国である日本でも今後、医療機関や行政の保健関係者等と連携し、健康に関するプログラムを開発していかなければならないことを痛感した。

○スポーツクラブの視察

5つのスポーツクラブを視察して感じたことは、どのクラブからも心温まる歓迎を受けたこと、そしてどのクラブにもクラブハウスのカウンターにビールサーバーなどがあり、クラブ員同士のコミュニケーションを大切にしていることであった。このような歓迎を受けて、ドイツへの愛着を感じ、また今後もドイツのスポーツクラブとクラブハウスを目指して頑張っていきたいと思った。

研修後の活動に向けて

ドイツの国民的風土から生まれたスポーツクラブのスポーツが、文化として明確な基盤を築いていることに深く感銘した。スポーツクラブの運営は地域住民の自主性によるボランティア活動を支えにし、スポーツクラブが公益性を持って社会に貢献している姿に素晴らしいものを感じた。

スポーツクラブは地域と密接に関わりを持ち、地域の様々な問題に積極的に参加し、スポーツを越えたコミュニティの役割を持って、地域住民のスポーツ、健康、文化活動の発展、そして地域社会の活性化に努めていくことが非常に重要な使命であるのだと知った。これからは地域と一体化し、町づくり、人づくりにつながるプログラムの開発及び活動をしていかなければならないことを学んだ。

おわりに

今回の研修で、団長をはじめ全国からの団員の皆さん、ドイツでの通訳の多田さんと松尾さん、担当して下さいました日体協の佐野さん、そしてアクセル・ベッカー氏と講師の皆さん、研修内容も人も素晴らしい財産になりました。本当にありがとうございました。

今後、本事業が益々盛んになり、日本及びドイツのスポーツクラブの発展に繋がるように、全国の仲間と共に頑張っていきます。

伊藤 啓太

財団法人岩手県体育協会
クラブ育成アドバイザー

はじめに

人生30年目にして初めての海外、パスポートの取得にユーロへの両替、それが今回のドイツ研修の始まりだった。ドイツが地域スポーツの先進国であり、総合型地域スポーツクラブのモデルだと学生の時に聞いて以来、いつかはドイツに行って現地のスポーツクラブを見てみたいと思っていたが、日本から出たことのない私にとって、まずはドイツという国の生活や文化、そしてその中のスポーツの位置付け、さらにはスポーツクラブが人々の生活にどう結びついているのかに関心があった。

そして今回、クラブマネジメント指導者海外研修事業に応募し、参加できることになり、クラブ育成アドバイザーという立場から、ドイツのスポーツクラブを実際に目で見て聞いて触れてみるとともに、行政をはじめとするクラブに対する周囲の支援体制やクラブ同士の繋がりに興味を持って、今回の研修に参加した。

ドイツ滞在について

ドイツと聞くと、「ビール」に「ソーセージ」—そんな月並みなイメージしか持っていなかったが、実際にドイツを訪れてみて感じたことは、人が優しく、陽気でそれでいてキッチリとしている印象であった。ドイツはヨーロッパの中でも治安の良い国の様で、今回訪れたグレーヴェンブロイヒやデュッセルドルフの街では早朝に一人で散歩することもでき、散歩しているとすれ違う人やお店の店員さんが気軽に声を掛けてきた。なかには「ニーハオ!!!」と中国人と間違えて（ドイツ人から見れば東洋人はみんな同じに見えるらしい）話しかけてくる現地の人もいたが、知らない人(外



国人) に対する対応が日本にはない感覚であり、現地の人の優しさを肌で感じる事ができた。

また、今回の研修では5つのクラブを視察して、そのうち2つのクラブと夕食懇親会を開催して交流を図ったが、全てのクラブの方々が本当にフレンドリーで、我々を心からもてなしてくださった。特にコルシェンブロイヒシニア世代スポーツクラブでは、一緒にケーゲル（ドイツボウリング）を楽しみ、ストライクを出そうとムキになる我々を優しく見守るとともに、ストライクが出ると自分の事の様に喜んでくれた。翌日のオルケン体操クラブでは、クラブにあるプラスバンドチームの演奏による盛大なおもてなしがあり、我々派遣団が行った鹿児島伝統踊り『おはら節』では、陽気に積極的に輪の中に入ってきて、最後にはそこにいる全員での輪踊りとなっていた。その後は急激にクラブの方との距離が縮まり、拙い英語での会話を楽しみ、最後には日本に帰らないでクラブに残らないかとの熱い勧誘を受けるまでにいった。

そして最後にキッチリしていると感じたこととして、基本的に残業はしない（仕事とプライベートの時間をキッチリ分けている）、ドイツのビールグラスには必ず目盛が入っており、その線以上

にビールを注がないといけない法律になっている（線より液体が少ない場合は注ぎ直しを要求できる）、みんなで飲んだ場合も日本みたいに割り勘にするのではなく、自分が飲んだ分だけをキッチリ払って帰る仕組みになっているなど、日本人との感覚の違いを感じた。

スポーツの位置づけ、 スポーツクラブに対する考え方

ドイツの人にとってスポーツは生活の一部（文化として成熟してるもの）であり、行政が税金を用いてスポーツを支援するのは当たり前だという考え方であった。今回訪問したコルシエンブロイヒ市でも、900万ユーロの負債を抱えており財政破綻状態（このままいけば2016年には市のスポーツ施設は銀行の抵当に入る）であるが、それでも毎年スポーツ施設の維持費等に100万ユーロの支出を行っていた。その理由として、「行政が青少年に対して何も出来なかったら、不良少年が増え、スポーツ大会なども開催出来ずに、まちの元気がなくなる」とのことであった。経済的なまちの財政破綻よりも、文化的なまちの生活を重視しており、そこにドイツの人々のスポーツに対する価値観が表わされていた。

スポーツクラブに対しては、どこのクラブも地域の人たちが自分たちの地域の為に運営しているクラブという意識が強く感じられた。基本的に会費は安く設定されており、月10ユーロ以下で参加出来るクラブがほとんどであった。そのため、日本ではクラブには有償のクラブマネジャーの配置が必須であるといった形で進められているが、ドイツのクラブの多くはボランティアベースで運営が行われていた。実際にドイツのクラブの大部分は300名以下の小さなクラブであり、話によると専任の職員を雇うには2,500名以上の会員が必要となってくるだろうとのことであった。また、スポーツクラブにはスポーツを楽しむだけでなく、スポーツを通じた地域課題（移民の問題、少子高齢化、健康に関してetc）の解決を目指すといった社会的使命も担っており、そういった部分が地域においてスポーツクラブが無くてはならな

いものとなっている。

スポーツクラブに対する支援、 クラブ同士のつながり

ドイツでは、市民に対してスポーツクラブをつくる権利が法律で定められており、所定の手続きを満たせば“登記されたスポーツクラブ”として活動することができる。（登記されたクラブには名前にe.V. が付き、税制の優遇などを受ける事ができる）そのため、ドイツ国内で約8万、ノルトライン＝ヴェストファーレン州では約2万のクラブが活動している。基本的に自由にクラブを作ることができるため、創ることに行政からの支援は一切なく、あくまで市民が中心となって自分たちの地域に必要なクラブを創っている。

スポーツクラブの運営に対しては、州や郡、市町村から助成金が出ているが、額は年々減少している。しかし、スポーツクラブにとって一番身近な行政である市町村からはスポーツ施設の利用において大きな支援を受けている。その内容としては、無償もしくは安価（年間数ユーロ程度）で市のスポーツ施設を利用できたり、施設そのものを優先的に長期に亘って借用したりする権利が与えられる。そのため、多くのクラブは市のスポーツ施設を用いて、クラブ活動を展開している。スポーツ施設に関しては、行政から大きな支援を受けているが、多くのクラブでは日本のクラブと同様、財政面や人的資源（ボランティア、優秀な指導者の確保）の問題など、今後のクラブ運営に関して課題を抱えている。

ドイツのスポーツクラブには長い歴史（最も古いクラブは150年以上）があり、そのことで様々な利点もあるが、反対に新たな変化が難しく、新しいアイデアや考えに対応できていないクラブもあり、実際には統合されたり潰れたりするクラブも数多くあるようである。（地域を代表するスポーツクラブ以外は、よほどのことがない限り行政がクラブを消滅させないように支援することはない）

そもそも、ドイツのスポーツクラブはそれぞれ目的を持って地域のために設立されており、地域

の違うクラブ同士の交流はほとんどないとのことであった。そのため、クラブの統合に関しても実際にはなかなかうまく進まない状況にあるとのことであった。クラブを支援する組織として、郡や市町村との縦の繋がりはあるが、クラブ同士の横の繋がりほとんどなく、サッカークラブなどで目的が一致した場合にパートナーシップ契約を結んだり、協力して事業を行ったりしているようである。

終わりに

今回の研修ではドイツが地域スポーツの先進国だということを念頭に置いて講義を受け、視察を行い、やはり学ぶべき部分も多くあったが、実際にはそれ以上にドイツのスポーツクラブにも様々な課題があり、長年続いているスポーツクラブもその時々において変化し、クラブの形は常に変わっていくものだと感じる事ができた。クラブの理念についても、全てが普遍的なものではなく、変化しているものもあるとのことであった。

ドイツのクラブでは自分たちの自由な意思でクラブを立ち上げて発展し、クラブが消滅するも継続するも全て自分たちの意思に任せられており、

その繰り返しでクラブが地域に根付いたものになってきている。(クラブが消滅することに対しても日本ほどネガティブなイメージはないとのことである)

日本とドイツでは、スポーツ自体やスポーツクラブに対する考え方や支援体制が違うのは当たり前だが、今後どのようにスポーツクラブが自立して、運営を継続させていくかは共通の課題である。その中で、地域に必要な存在として「地域になくてはならないクラブ」といった点ではドイツのスポーツクラブに学ぶべき部分が多くあり、地域におけるスポーツクラブの役割(社会的使命)を日本の総合型地域スポーツクラブは改めて考えていく必要があるのではないかと思う。

現在、岩手県内でも約50の総合型地域スポーツクラブが設立され活動をしている。今後、これらのクラブがスポーツの分野だけではなく、地域におけるスポーツクラブの役割(社会的使命)を担った、本当の意味で「地域になくてはならないクラブ」となっていければ、100年続くクラブになる可能性を秘めている。

そのためにも今回のドイツ研修で学んだこと、感じたことを少しでも岩手県内の総合型地域スポーツクラブに還元していきたい。

木間 奈津子

NPO 法人アクアゆめクラブ
理事

はじめに

私たちが取り組んでいる‘総合型地域スポーツクラブ’とは何か？—そんな疑問を抱き、その答えが見つからず、モヤモヤしたのがクラブ設立4年目。政策としてドイツのスポーツ文化を日本に取り入れたことは、日本人らしいスポーツ振興策のカタチなのかもしれないと思いつつも、正解のない道をどう進んだら良いのか、その‘道しるべ’を求めていたような気がする。

ドイツのスポーツ文化、100年続くクラブの根底には何があるのか。どんな仕組みがあって、その結果、100年もの間クラブが守られ続けたのか。そのリーダーは次の後継者へ何を継ぎ、どんな言葉を交わすのか。知りたいことは本当にたくさんあった。

そして、2011年3月11日、のちに千年に一度と言われた東日本大震災はスポーツのもつ効用（チカラ）を再認識させるとともに新たな機会を与えてくれた。それは、人の戯れる場の創出である。そのツールはスポーツだけでなく、娯楽や交流など多様で構わない。「そこに行けば、あの人と会える」—そんな安心感のある場所を創り出すことが、震災による避難所生活を通して感じた新しい地域コミュニティのカタチのような気がした。ドイツのスポーツクラブの歴史にも何か似たような理由があるのではないかと思ったことも、この研修を志願した動機の1つである。

ドイツでの気づき

ドイツ（ライン・ノイス郡）のスポーツ文化に関して、講義やクラブ訪問を通じて日本との類似する課題や異なるクラブハウスの機能、クラブへの支援の在り方など、その実情を知ることができ



たことが一番の収穫であった。また、クラブ訪問で多くの現地の方（クラブ運営を支える中心人物）と出会い、ジェスチャーではあるが対話し、その表情やパフォーマンスを体感するなかで、もはや、スポーツは、政策としてのツール（手段）ではなく、風土にとけ込んだ地域コミュニティのルーツ（起源）であるようにも思えた。日本で言う「スポーツ:sports」ではなく、戯れを意味する「スポーツ:sport」を所々で垣間見ることが出来たような気がする。

どのクラブも「財政難が課題さ」と苦勞なく話す。「クラブの合併は仕方ないことさ」と羞恥せずに話す。日本人は皆、モデルになるクラブのはずなのに何を簡単に言っていると心の底でそう思ったに違いないが、きっとそのあとにはこう続いたはずである。『でも、楽しいよ!』と。—なぜ、楽しい？

私（たち）がよく考えている「スポーツを通して地域貢献」とか「スポーツで健康づくり」とか、そういった感覚ではなく、「幸せなスポーツができる地域だから楽しい。だからここで暮らしたい。だからクラブに参加する」という感覚の方が正しいのかもしれない。政策としてのスポーツの姿ではなく、生活の中で、その地で暮らす自然な時の

中で、当たり前のようにあるスポーツの姿がこの地に今もまだ長く生き続けている気がした。きっとスポーツをツールとして考えた途端、「楽しむ感覚」を失ってしまうのかもしれない。彼らの表情からそんなことを感じた。

アクアゆめクラブへのインプット

・ゲストブック (Gästebuch)

TUS グレーヴェンブロイヒ (TURN-UND-SPORTVEREIN GREVENBROICH1911) で最後に記入した訪問者名の記載された本。きちんと表紙にはクラブ名が刻印された分厚い洋書のようなものに日本視察団一人ひとりが漢字とアルファベットで氏名を記入した。視察でわざわざ足を運んでくれた方を大切にすることで、その積み重ねがクラブの価値にも繋がるのだということに気づいた。これはすぐにでも実践する。

・クラブグッズ (Verein Waren)

フラッグだけでなく、ピンバッチやボールペン、クラブ章やTシャツなど、多くのグッズを持つクラブが多かった。利益を求めないものにお金を費

やすこともクラブの100年を考えると大切なことだと気づいた。平成25年度予算を考えると皆に提案したい。

・スポーツヘルパー (Sport Helfer)

有償ボランティアが定常化するなかで、子どもたちのスポーツへの関わり方への一工夫としてはおもしろい試みだと感じた。制度としての導入は難しいかもしれないが、子どもたちの長期的なスポーツ参加の動機づけとしても早急に検討したい。

最後に

今回の研修では、一番初めの問いかけ（総合型地域スポーツクラブとは何か？）に対して、100%の答えを見つけられたわけではないが、少なくとも多くのヒントに出逢うことができたように思う。この出逢い（ネットメイク）を次に繋げること（ネットワーク）が新たなミッションでもあり、この研修の成果となることだろう。自分なりの‘道しるべ’を描きながら、100年後の未来に向かって歩み出したい。

鈴木 元子

21' スポーツクラブ in しらかわ
副会長

はじめに

地域自治会の体育部長を任されていた私が総合型地域スポーツクラブの設立準備委員会のメンバーになったのが平成19年春、翌年2月16日設立式典に立ち会った。続いてクラブの理事を拝命、平成24年4月からは副会長の任を担うようになった。そんな慌ただしい平成24年4月末、会長から「ドイツで勉強してこない？」との打診があった。末っ子が高3になり母親の海外研修はちょっと難しく、一週間は家を空けられないと判断。「残念ですが無理ですね」と後ろ髪を引かれながら返事をした。事の顛末を主人に話したところ「せっかくの機会だから勉強してきたら」との思わぬ返事。その一言に押され「うん！私ドイツに行く！」すでに心は飛行機に乗ってしまった。ただ、その後がびっくり。研修の主催が日本体育協会、募集人数は全国で13名。「あ～無理～」しかし元子はすでに機上の人。せめて申込書だけはクラブから送って頂くことをお願いした。5月の連休の多忙な中、会長さん、事務局長さんが骨を折って下さった。そして選考されたとのご連絡。意欲満々となり、いよいよまずは上京の人となった。

事前研修会

平成24年9月3・4日、東京原宿の岸記念体育会館での研修会へ参加するため久しぶりに上京。ここで13人の参加メンバーと初めて顔を合わせた。緊張の中、自己紹介から始まり、講義、その後ドイツ研修に参加するにあたっての基礎情報の確認等、慌ただしく時間が過ぎた。夜の懇親会では講義をおこなって下さった山本理人先生、平成23年度派遣団の伊端団長、若藤団員も参加されてドイツでの経験談を話して下さった。同じ目的を



持つ同志達であるためすぐに打ち解けることができ、そのことがドイツでの研修をより親密で温かいものにしてくれた。

講義研修

連日ライン・ノイス郡庁舎でドイツスポーツのシステム、ライン・ノイス郡のスポーツとスポーツ振興、スポーツクラブと小学校の連携、スポーツクラブの健康志向コース、クラブマネジメント、社会の発展とスポーツ、などの講義を受けた。通訳を介しての聴講は初めての経験だった。ドイツのスポーツクラブは、1817年設立のハンブルグ体操クラブから現在に至る。200年近い歴史がありスポーツクラブ先進国として他国の追従を許さない高いレベルではあるが、そのドイツでも少子高齢化・個人主義化・小中学校の半日制から全日制への移行・ボランティア希望者の減少・財政面での協力が得辛くなっている等々、問題を抱えていることを知った。

クラブ視察

コルシェンブロイヒシニア世代スポーツクラブ

は会員が高齢であるため、病後のリハビリテーション等も医師の指導の下行われていた。ケーゲル（ボウリングに似たスポーツ）ができる施設では、レストランも併設され仲間が集まって食事をとることができ、私たちもその施設で飲んだり食べたりボールを投げたりとクラブの理事たちと楽しい時間を過ごした。そのような経験のない私にはとても新鮮な驚きであった。

TUSグレーヴェンブロイヒは、大きなサッカー場があり、クラブハウスには多数のトロフィーが置かれ壁には写真やペナントが飾られていたりする等、歴史の重みを感じた。何よりもビールサーバーが付いたカウンターがあり、クラブがスポーツのみを提供する組織ではないことを強く感じた。そのことが地域にクラブが支持され根付いた理由の1つかも知れない。

オルケン体操クラブは、人工芝のサッカーグラウンドや生涯スポーツが楽しめるための施設が整えられており歴史ある中堅スポーツクラブであった。中でも大小体育館の間に上下に可動する床があり舞台としても使えるようにしてあり、しかもその仕組みを含む体育館は会員の手作りであることに驚かされた。この設備は「一見無くてもいいのではないか?」、でもそこに彼らの哲学の匂いがした。クラブハウスも充実しており、ここでも重厚なビールサーバー付きカウンターが「でん!」と構えて私たちを待っていた。視察後の懇親会では、理事の方々がそのカウンターで食事を用意してくださったり、クラブ所属のプラスバンドの演奏があったり、踊ったり、歌ったり…「クラブハウスはこのように楽しむ場所でもあるのよ」と教えてくれているようだった。

TSVバイヤードルマーゲン。ここは凄い、の一言だった。大企業からの支援を受けているクラブだからか。それにしても屋外にある50M温水プール、室内陸上トラックがある体育館。こんな設備があったらいいと思う施設が全部ある。トップアスリートの育成も行っている。ただ問題が無いわけではなく、特に財政面で問題を抱えていた。

BVヴェックホーフエン。この地域は人口約1万人で、移民が17ヶ国から集まる等多く、その移民も会員として参加している。4つのサッ

カーグラウンド、体育館、クラブハウスは市が所有している。財政、企画面で行政と連携し、青少年の健全育成、ボランティア参加の重要性を推進している。また郡の中で最初にクラブ指導員育成を担ったクラブであったようだ。

クラブ視察で感じたことは、

- ① とにかく基本的にスケールが大きい。
- ② コミュニケーションを大切にし、クラブにおいてその点の優先順位を高くしている。これが地域の人達に支持されクラブが長く続いている理由だろうと思われる。また、そのためにクラブハウスを最大限活用している。
- ③ 行政、企業との連携が図られている。
- ④ 地域スポーツクラブ先進国ドイツでも悩みを抱えている。

といったことである。

今後の活動に向けた感想

今回の研修で地域スポーツクラブ先進国ドイツを五感で感じる事ができたこと、高橋団長さんを始め全国の同志と知り合えたことは私の宝となった。眼からうるこが何枚落ちたことか。ありがたいことである。

この宝に背中を押してもらいながら、21' スポーツクラブinしらかわを会員の皆さんが笑顔で元気にいつまでも来て頂ける、そんなクラブにしていきたい。それには、地域の人たち、学校、行政との連携をさらに進め、今まで考えもしなかった企業との協力も模索して、財政面での強化も検討したい。松平定信（寛政の改革を行った老中、白河藩主）さん、負けませんよ！

終わりに今回のクラブマネジメント指導者海外研修事業に際し、関係者の皆様に多大なご協力を頂いたこと、心よりお礼感謝申し上げます。また高橋団長さんを始め団員の皆さん、日本体育協会の佐野さん、本当にお疲れ様でした。心からの感謝をお伝えいたします。

栗田 勇夫

クラブ幸手
事務局長（ゼネラルマネージャー）

はじめに

「総合型地域スポーツクラブ」という言葉に初めて接したのは、平成8年、全国体育指導委員連合機関誌「みんなのスポーツ」に、私の住む1,200戸のニュータウンが「次世代に向けてのふるさとづくり<幸手市体育協会香日向支部>の立ち上げ奮闘記」として掲載された際、神戸大学の山口泰雄教授から「総合型地域スポーツクラブのスタートです」というコメントをいただいた時であった。その時は総合型とは何か分からず、その後文部科学省の「平成16年度総合型地域スポーツクラブマネージャー養成講習会」に参加させていただき、連綿と総合型に携わらせていただいている。

各方面から日本の総合型の原点はドイツにあると聞くにつけ、いつかはドイツ研修に参加したい、と思っていた。また、80のクラブ（平成24年12月末現在）で構成される埼玉県総合型地域スポーツクラブ連絡協議会での共通課題である<人・物・金>についてのヒントを探そうと、この研修に臨んだ。

研修から ードイツも日本も悩みは同じー

① ボランティア：人

ドイツでは、200年以上の歴史と8万を超えるスポーツクラブを擁し、市民の30%以上がどこかのクラブに属していると言われている。クラブ運営のスタッフは、医者や税理士等一部の資格が必要な方を除いてすべて無償のボランティア。時によってはコーチもボランティアであるようだ。サッカーのプロリーグにも出身選手を輩出しているTUSグレーヴェンブロイヒは100年以上の歴史あるクラブだが、選手・役員も含め、手弁当で楽



しんでいる。ドイツはボランティア精神が脈々と継承されていると感じた。

しかし、各クラブの理事からは、昔はもっと沢山の仲間達が色々な事業に参加協力してくれた、との声もあった。現在は、ボランティア不足の傾向もあり、郡も青少年スポーツの協力者求むとの広告を出したり、学校でもスポーツにおける青少年ボランティア活動を奨励したりしているようだ。

コルシェンブロイヒシニア世代スポーツクラブは35年の歴史を持つクラブだが、会員の年齢は55～93歳とシニア世代を対象とし、800人以上の会員が、健康体操、ダンス、ハイキング、温泉旅行会等、日々のスポーツ・文化ライフを楽しんでいる。スタッフとしては、やはりシニア世代のボランティアがクラブの運営に携わっていた。視察の夜は、そんなスタッフらと夕食とともにケーゲル（日本のボウリングの小型版）を楽しみながら歓談した。日本のような行政主導の「老人クラブ」は無いようだ。

スポーツクラブは住民の手によって創られ育てられ、住民のメンバーによって成立し、コミュニティ形成に強く根ざしている。クラブハウスが地域の人々の心地よい居場所になっているようであった。

② 学校と地域スポーツの連携：人・モノ

ドイツでは、学校制度の改革で半日制から全日制に移行が始まっている州もあるという。その影響で、今まで学校での授業は半日で終わり、体育の授業はなかったが、体育の授業も行われるようになってきたという。これまでは地域のクラブが子どもたちのスポーツの受け皿となり、学校施設を使えたが、徐々に活動場所（校庭・体育館等）の確保が難しくなっているようだ。

そのため、学校のクラブ活動や授業に地元のクラブの指導者を派遣するなどの連携も検討される等、学校体育と地域のスポーツクラブが連携して、子供たちの活動場所やスポーツの機会の確保に工夫を凝らしているようだ。

日本では、元々学校活動の支障のない範囲で実施される「学校開放事業」で教育施設を利用しているが、その状況とは異なるようだ。

③ 少子高齢化：金

クラブ運営には、郡や市から援助がある。その他、市からは市の所有する施設の無償（もしくは限りなく安価での）借用等、クラブに対する各種援助もあるようだ。

ただし、日本に次ぐ世界第2位の少子高齢化社会であるドイツでも、生産世代の減少に拍車がかかり、非生産世代が増加の一途で財政難に直面し、クラブへの助成もままならないのが現状であるようだ。

しかし、コルシェンブロイヒ市では、町の活性化のため、またこれからの町を担う青少年のために、クラブへの支援を続けていくという。また、ノイス市スポーツ連盟としては「市民にはスポーツクラブを創る権利がある」ことを元に、厳しい時代であるがクラブ活動を支援するためのロビー活動を市や郡に対して展開していく、との話もあった。今まで無償であった市の施設も徐々に有償になっていくだろうという声もあった。

そんなドイツのクラブの会費の例をあげると、幼児：4ユーロ（約440円）／月、少年：5ユーロ（約550円）／月、大人：6ユーロ（約660円）／月程度と非常に安価なようである。

研修を終えて

1 クラブハウスは羨ましい限りであった。仲間と時間を共有する楽しみの場所。そこに行けば誰かがいる。お茶を飲みながら、また酒を飲みながら歓談できる。ペナント・カップ・バッジ・ポスターなどが貼りめぐらされ、クラブライフを満喫しているドイツのクラブの核になっていた。わがクラブにもいつの日か…。

2 ドイツでは、「スポーツを通じた町づくり・文化コミュニティの確立」、また「スポーツはクラブで学ぶもの」という社会通念が、スポーツクラブの根底を流れて100年以上経つ。それを踏まえ、市町村、郡、州、国の各レベルでスポーツクラブに支援を行っている。国民のおよそ3人に1人はどこかの地域のスポーツクラブに入ってスポーツを楽しんでいると言う。スポーツクラブ活動は単なるスポーツを競わせるものではなく、地域住民が世代を超えて集う極めて社会公益性をもった活動拠点である。その為スポーツクラブを奨励し、発展させる政策が採られている。地域社会を包括する社会政策に極めて重要なポジションを占めるのが、ドイツのスポーツクラブの姿である。

一方、日本では、長く続く不況で企業の衰退が続き、企業チームや冠大会などのスポンサーが撤退を余儀なくされ、選手や大会の開催に支障が起きている。そのような中で、クラブへの支援も減っている。

「スポーツ振興法」が2011年に「スポーツ基本法」に改正され、それは「スポーツを通して幸福で豊かな生活を営む権利は全ての人々の権利」を謳い、地域スポーツの振興を掲げているものであるが、地域の自主性を生かして地域に根差した草の根スポーツを育てる仕組みは国から与えられるものではない。スポーツ・文化を楽しむことの自発性を推進力として生かすことこそが「新しい公共」の考え方ではないだろうか。

日本の総合型地域スポーツクラブは20余年の歴史で、当初から行政と程良い関係を保ちながら自立する手立てを模索している。地域住民に広く開かれたコミュニティークラブとして、文化活動（スポーツも文化である）等も取り入れた、広く地域住民に門戸の開かれた仕組みとして総合型地域スポーツクラブが地域に認知された時、公益的なステイタスが得られるであろう。そうすれば、学校、企業、行政と協働事業を行い、地域や社会が抱える様々な問題を解決することが期待できるのではないかと思う。

終わりに

平成24年クラブマネジメント指導者海外研修に参加し、全国の熱い仲間と出会えたことも収穫となった。そして諸先生方はもとより、現地通訳の多田さんと松尾さん、日体協の佐野さんには大変お世話になりました。また、高橋団長の細やかな心配りで安心して楽しい研修ができました。有難うございました。

そして、今後全国の仲間とともに微力ながら力になっていけたらと思います。また皆さんにお会いできる日を楽しみにしています。

西村 貴之

NPO 法人 クラブパレット
ゼネラルマネジャー

参加動機

団員レポートを執筆するにあたって、今回の海外研修事業に応募した際の申込書を振り返ったところ、「海外研修事業への参加の動機と派遣後の展望等」の欄には以下のように書かれていた。

====

(以下抜粋)

現在、クラブマネジャーとして8年目を迎えている。これからのクラブのあり方や将来のビジョンを考える際に、ドイツのクラブライフやスポーツ振興のあり方にふれることで、自分自身ならびに日本の今後のスポーツ全体のことを考え、自分がどのように貢献していくことができるかを考える機会としたい。石川県クラブ連絡協議会（いしかわクラブゾーン）においても事務局を務めており、今回の研修で得た知識を県内の他のクラブにも還元できるように取り組んでいきたい。

また、日本から同行するメンバーとも切磋琢磨しあい、どうすれば今後地域のスポーツで生計をたてることができる環境を創っていくことができるかについても議論し合いたい。

さらに、日常業務から離れ、自分自身のあり方、クラブのあり方を改めて見つめ直す機会としたい。

====

この想いは今振り返ってみても、ドイツ滞在期間中の自分の行動や考えたことと違和感はなく、この研修がとても有意義な時間となったというのが率直な感想である。詳しくは以下で述べていきたい。

ドイツと日本の共通課題

今回の研修カリキュラムではクラブ運営者や役



員のみならず、会員、自治体関係者、スポーツクラブ連盟事務局スタッフ、学校関係者、大学研究者といった様々なステークホルダーからドイツにおけるクラブについて様々な視点からの意見を聞くことができた。その甲斐あって、事前研修の山本理人先生の講義にあったドイツのクラブの様々な課題がより詳しく理解できた。

多くの関係者から聞こえてきたドイツクラブの課題としては、①ボランティアスタッフ（指導者、クラブ運営スタッフ）の不足、②財政難（行政からの補助金や助成金の減少）、③競技スポーツ離れと商業スポーツ施設の隆盛（実際に宿泊したホテルの近くにもフィットネスジムがあった）、④「全日制学校」の導入によるクラブ活動時間帯の縮小等があった。④の全日制学校に関しては日本では以前から導入されているため若干状況は異なるが、それ以外の課題に関しては日本の総合型クラブが直面している課題とほぼ同じであると感じた。

自分としては、その課題をどのようにドイツクラブが解決したのかということを知りたかったのだが、「これが正しいやり方だ」という答えはなく、各クラブが暗中模索を繰り返す中で、フィットネススタジオを設置して流行に合わせたプログラムを創ったり、これまで競技スポーツが中心だった

クラブが健康づくりを目的としたプログラムを開発したり、各種イベントの企画、企業に対して健康づくりのサポートを行ったり、トップアスリート育成のために開発された動作解析ソフトを工場労働者に用い腰痛やケガなどのリスク軽減のための指導サポートや助言活動を行うことで対価を得る、といった事例が生まれていることを聞いた。

現在日本各地の総合型クラブのいわゆる「先進事例」と呼ばれるものの数々は、決してドイツでの取り組みに劣っていることはなく、自信と誇りを持ってその活動を継続していくべきであると確信した。地域住民が地域の課題を解決するために頭を悩ませ、知恵を出し合い、形にした1つ1つの取り組みの連続がクラブに歴史と伝統と地域愛を生んでいくのである。

ドイツと日本の違い

ドイツのクラブと日本のクラブが現在直面している課題はほぼ同じであるとした。しかしながら異なる部分もあった。決定的な違いは歴史である。今回の視察においても創立100年を超えているクラブがいくつかあった。自クラブが創立から10周年を迎えたということと比較してみても、圧倒的に長い時間、クラブはドイツ国民の身近なものとして存在し続け、地域の歩みとともにその歴史を刻んできたのである。100年の間にはよいことも、悪いことも、いい時期も、悪い時期も様々な出来事があったのだと思う。それでもクラブが無くなることなく引き継がれてきたことには大きな敬意を払うべきである。「充実した施設」、「行政からの支援」、「スポーツ文化の違い」等、日本の各クラブが置かれた現状から見た場合にはドイツを羨ましく感じる部分があるかもしれないが、それは決して一朝一夕ではなく、スポーツを愛し、地域を愛し、そして人生を楽しもうとしてきた多くの方々が積み重ねたプロセスの中で勝ち取ってきた財産なのだということを頭ではなく、まさに体感することができた。お金も材料も自分たちで調達し、100%自前で建てた体育館にクラブハウス。クラブハウスにはバーカウンターがあり、ビールサーバーからは地元のビール。スポーツの後は

ビールを飲みながらのコミュニケーションを通じてクラブの、そして地域の未来を語り合う。まさに夢の様なでもきっと日本でも実現できうるだろう素晴らしいクラブライフがそこには確実に息づいていた。こればかりは文章で伝えることは難しい。ぜひ多くの日本のクラブ関係者に実際にドイツを訪れてほしいと願う。

だが一方、ドイツクラブの長い歴史そのものが「次なる変化」を生みにくくしている実態もあるのではないかと感じた。常に時代や社会は変化している。そして変化のスピードは年々上がっている。であればクラブもその時代や社会に合わせて変化しなくては生き残ることができない。日本のクラブがこれから歴史を重ねていく際には、常に時代や社会の流れを意識し、「常に変化し続ける」ことで日本独自の「100年続くクラブ」のスタイルを確立していくことが重要だと再認識できた。

最高の仲間達

クラブハウスでの、現地クラブのスタッフとの慣れない英語でディスカッションする中では、「やっぱり日本もドイツもクラブに関わっている人間は熱いな！」と嬉しくなった。また、今回の滞在をともに過ごした日本派遣団のメンバーとの交流では、これからのそれぞれが描く夢への思いを共有することができた。自分の親程の年齢の諸先輩方、ちょっと年上の兄貴達、また自分の同世代と、多世代かつ多様なバックグラウンドを持った仲間を得ることができたのはこれからの人生にとって大きな財産だといえる。

特に同世代のメンバーとは「これからの日本のクラブを背負っていくのは俺達だ！」と相当に意気込みつつ真剣に語り合うことができた（と私は思っている）。様々なところでクラブ間ネットワークの重要性が語られるが、その根本は「信頼関係にもとづく人と人とのつながり」だと私は思う。心から信頼しあえる仲間との出会いが強いネットワークを生み出してくれた。これからみんなが全国各地で活躍するニュースがとても楽しみだ。

これからの展望

Think Globally, Act Locally. (地球規模で考え、地域で行動する)という言葉聞いたことがある。今回のドイツ研修を終えて私がこれから実行したいことである。ドイツのクラブには絶対的な歴史があった。そして、100年続くクラブの歴史やクラブライフを体感し、その鮮明なイメージを描くことができたことは何物にも代えがたい貴重な経験である。しかしながら次に深く見つめるべきは、自分のクラブが活動する地域の置かれた現状に他ならない。地域が抱える様々な課題をスポーツや運動を通じて、地域住民と共に解決していくプロ

セスの連続が日本に100年続くクラブを生むだろう。日本の各地に100年続くクラブが生まれる時、日本の社会や地域はきっと笑顔と楽しみのある豊かなものになっているに違いない。そんな夢を語り続けることで、自分が得たものを社会に還元していきたい。

貴重な機会を提供して下さった日本体育協会関係者の皆さん、高橋団長はじめ派遣団の皆さん、ドイツでお世話になった方々、本当にありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願ひ致します。

北倉 利治

なかよしクラブすなみ
理事長

はじめに

私は、平成2年から瑞穂市（合併前：巢南町）に住み、少年の相撲教室を20年以上続けている。前に住んでいた場所でも10年行っていたため通算30年以上の教室となるが、最初は大人たちの同好会で始め、そのうち少年対象の教室になり行政の支援も得て、現在の県の相撲関係者を多く育ててきた。そして、10年ほど前に中学のPTA活動で「総合型地域スポーツクラブ」を知り、7年ほど前、行政がクラブを立ち上げると言う話が出た際に私の理想に合うと思い、相撲教室を含むクラブを平成20年3月8日（私の誕生日）に設立した。

私の地域では、総合グラウンドや学校以外の体育館がなく、クラブの主な活動は公民館で行っている。しかし現在、市内に総合運動場施設建設の計画があり、そのためにドイツの施設やクラブハウスを徹底的に見て参考にしようと思ったのが、研修に参加したきっかけであった。

研修について

10時間以上の空の旅に、遠いところに来てしまったなと感じた。私にとっては初めてのヨーロッパであるが、レンガ作りの建物が綺麗に整理され右側通行のアウトバーンを見た際に、ドイツに来たのだと実感した。

最初の日、徒歩にて向かったライン・ノイス郡の郡庁舎で講義が始まり、期間中には8回の講義と5個のクラブ視察を行い、クラブの実態を勉強した。9月の事前研修にて、『ドイツのクラブがとても凄いものという思いで研修をしない方がいい』という話があり、どんな内容になるのか楽しみであった。例えば、小学校の学力低下に伴い半日制であった小学校が全日制となった結果、午後



からクラブに来ていた子供の会員が減少していること、世界的な不況により企業からの寄付金が得られない状況になっていること。行政等の助成も減ってきていること。またボランティアの理事や若者も見つけにくい状況になってきているなどの現状を知った。

しかし、100年以上続くクラブは今までに築き上げてきた歴史と経験のせい、それほど悩んでいないように感じた。

コルシェンブロイヒ市での自治体とスポーツ振興の講義では、33,000人の市で11,000人のクラブ会員がいることや、スポーツ施設は2面の競技ができる体育館が4ヶ所、サッカー場11ヶ所、屋内プール1箇所、グラウンド3ヶ所、陸上競技場3ヶ所、テニスコート31面、その他多数の施設を所有する市がクラブに対して少ない施設利用費で貸し出している話があった。市は現在、年間100万ユーロ（約1億円）の負債を出しており、それは数年後400万ユーロ（4億円）に膨れ上がり、学校などの公共施設が銀行などの担保になる可能性があるそうだ。それでも青少年の活動を妨げることや、クラブの会費を上げたり、規模を小さくしたりする対策は考えていないとのことであった。ドイツの国民は堂々としていると思った。

ドイツのクラブは会員300名程度のクラブが大半であるそうだ。その中には経営が行き詰まり、存続を諦めるクラブもあるとのことだった。そのようなクラブは日本のように会費の値上げ等で経営を助けていかないのか？との質問には、会費も値上げはせず、7ユーロ（700円程度）のままであるとの話であった。また、連絡協議会のような形でクラブ間の情報交換を行い、互いに活動を活性化させようとはしないのか？といった質問にも、ドイツではクラブ同士の交流はあまりないため、情報交換もしないとのことだった。そんな中での唯一の打開策は、会員が300名程度のクラブは2,000人以上のクラブと合併して活動を続けていくことであるとのことから、ドイツではクラブを存続させることよりも、会員の活動を止めないことを優先しているように思えた。

ドイツのクラブの発祥は、そのスポーツを好きな人が集まったことで始まり、その活動を行政が良いものだと支援してきたのが現在のクラブの形であることから、いつ解散しても問題はないという考えがあるのだと思える。現在の日本のクラブは、多くが行政から「これからのスポーツは市民が考え行うものなので、支援は少しするので皆さんで考えて立ち上げてほしい」と言われ出来たクラブである。根本が違うのだろうか？しっかりした理念がドイツにはあると思える。

それでも会員や役員の気持ちはどちらも同じで、青少年が楽しく活動できることや、住民が楽しく長く健康で居られることを目指しているのは変わらないと感じた。

施設について

長い歴史のドイツのクラブは何処に行ってもすぐサッカー場やクラブハウスがあった。日本で言うと、何処にでもある野球場のようであったが、

ドイツのサッカー場はもっと多いだろう。2日目は全て徒歩での行動であったが、視察した2つのクラブとも陸上のトラック内に芝のサッカー場、そしてクラブハウスがあるという環境だった。さらにクラブハウスにはビールサーバーがあり、いつでも飲めるビールやテラスに出れば競技を観戦しながら寛ぐことのできるテーブルがあった。このような環境があればいつでも会員が懇親できるだろう。日本では喫茶店や居酒屋で飲みニケーションしているが、こんなクラブハウスを利用できれば安く上がり、沢山の人が集まることが出来るだろう。大変羨ましく感じた。

最後に

9月の事前研修会から始まった研修であったが私は非常に楽しみだった。クラブのために同じ考えを持ち、前を向いていくボランティア集団14名が行動を共にすることにわくわくしていた。

そして8日間過ごした研修や懇談会は、思った通り楽しく、また非常に勉強になった。また、55歳の自分であるがまだまだ勉強しなければいけないとも感じた。これからも若い人や先輩の意見を聞きながらクラブ運営を頑張っていきたい。

今回知り合えた14名の方々は私の一生の財産になった。参加された団員のクラブは5年以上過ぎ、クラブの先行きも見えてきた方ばかりであった。研修中はドイツの情報だけでなく、各クラブの情報も聞き、私のクラブの悩みを解く参考となった。今後もこの研修で仲良くなった方々と情報を交換し合い、何処にも負けない充実したクラブを創っていきたいと思う。

皆さん研修中はご迷惑をおかけしました。そして、心から有難うございました。また、どこかでお会いできたら幸せです。

睦谷 一馬

総合型地域スポーツクラブ阪南A C
理事長兼クラブマネジャー

はじめに

ドイツは、歴史のあるスポーツクラブが数多く存在し、日本が総合型スポーツクラブ導入のモデルとしてきた国である。私は、この海外研修で初めて、ヨーロッパの地に足をおろすこととなったが、日本とはひと味ちがう文化や食事、風景に触れることができた。

また、スポーツの持つ人を引きつける魅力を肌で感じることができ、研修に参加した仲間達と互いに語り合える共通の話題を持つことができ、そして、スポーツに関わるいろいろな人々に出会えた。

私は今回のドイツ海外研修で、学びたかった事柄が2つあった。まず、第1は、「クラブ運営のコンセプト・テーマ」であった。ドイツ社会の現状をいろいろなクラブの人が問題意識をもって認識し、クラブ活動のプログラムとして取り組んでいる内容である。

第2は、「クラブ運営の原動力・推進力となっている事柄」であった。ドイツのスポーツクラブが、何世代にもわたって引き継がれている理由、スポーツクラブに人を引きつける魅力を是非、知りたかった。

ドイツも高齢化社会

ドイツは、ヨーロッパで1位の高齢化社会、日本に次いで世界第2位の高齢化社会である。人口構成では、50～60歳が最も多い。今後のスポーツクラブの運営は、日本もドイツもスポーツに留まらず、社会情勢の変化に目を向け、アイデアを出しながらクラブのコンセプトを持ち運営することが必要である。

私の地元にも高齢者を対象としたスポーツクラブがある。しかし、彼らがクラブ運営で目指して



いるものは、「楽しくスポーツをすること」以外にはない。これでは、クラブ会員の年齢が高くなればなるほど経営が難しくなり、やがて消滅してしまうだろう。しかし、ドイツの高齢者をターゲットにしたクラブの運営は実に多岐に亘っており、コンセプトは「健康」であった。また、州内に高齢者をターゲットとするクラブが40～50個存在するそうだが、ターゲット年齢を決めることで効率的な運営ができていたようであった。

私のクラブにおいても、「健康」「高齢者」をテーマとして取り組んでいきたい。医師・看護師・保健師・理学療法士等の資格を有する人たちを巻き込んだ形での「健康プログラム」が提供したいものである。そのためには、民間や財団がこのようなプログラムに対して助成できる体制の整備が必要であると感じた。

また、ドイツでは、社会的責任をもったスポーツクラブ（登記済みのクラブ）は、クラブを運営する権利を法律で保障されており、スポーツ施設はほぼ無料で利用することができる。施設の維持管理については、市・郡・州等が行い、スポーツクラブは市や郡からの助成を受けながら市民のためにプログラムを提供することが役割となっている。しかし、このような状況を日本で実現する

ことは、市町村や県の財政状況を見てもほとんど不可能に近い。ドイツにおいても、近い将来財政の好転がないかぎり、制度の見直しが必要になるのではないかとされた。

クラブの原動力と推進力

ドイツのスポーツクラブを運営する原動力となっているのは、「ボランティア精神」であるが、日本と同じようにその推進力はやや減速しているようであった。運営スタッフや役員の確保が難しい状況になりつつあるようである。しかし、ドイツのスポーツクラブは、生い立ちからして地域に根ざしたスポーツクラブであり、地域からヒーローを誕生させたり、地域住民の健康を支えたりする役割を担っていると考えられる。

では、日本におけるスポーツクラブ運営の原動力も、やはり「ボランティア精神」といえるだろうか。私は、原動力は間違いなく「ボランティア精神」であると思うが、私のクラブでは「ドイツのような力強さやパワーがない」と感じる。スタッフ全員の気持ちが一つになっていないからだと思われる。

それでは、クラブ運営に推進力を付けるためにはどうしたらいいのだろうか。私は次の事柄を私のクラブで試してみようと思う。

- ①クラブ運営やクラブ経営について、スタッフが学べる機会をクラブとして提供する。
- ②スタッフをサポートする体制をクラブとして整える。

③クラブとしての目標を定め、それを目指す運営体制の整備を行う。

クラブ運営は運営スタッフの創意と工夫により行うものであり、アイデアに共感し提供したプログラムに対して会費や参加料を払ってくれる会員がいて、成り立つものだと考える。これからのクラブ運営はターゲットに魅力あるプログラムを提供することであり、継続するためのしっかりとした原動力とプログラムを進行するための推進力を確保することが大切である。

ドイツ海外研修を終えて

ドイツ海外研修を無事終えられたことに対し、日本体育協会の佐野さんをはじめ、この企画に関わっていただいた皆様に感謝します。また、この研修が今後も続きますように、日本スポーツ振興センターの関係者の皆様をお願いいたします。

第4期ドイツ海外研修の高橋団長を始め、15名の団員の皆様、研修では大変お世話になりました。特に、「オルケン体操クラブ」での楽しい時間は、生涯忘れることはないと思います。団員の皆様とまたどこかで再会できることを楽しみにしています。

最後になりましたが、ドイツで通訳としてお世話になりました多田さん、松尾さん、最初から最後まで私たちに同行していただきましたアクセル・ベッカー氏には心からお礼申し上げます。

Danke schön !

権藤 弘之

兵庫県芦屋市教育委員会スポーツ・青少年課課長補佐
(社会教育主事)

はじめに

今回、平成24年度公益財団法人日本体育協会「クラブマネジメント指導者海外研修事業」日本派遣団に参加させてもらったことは、私にとって意義深い体験となった。また、全国各地のスポーツクラブから参加された14人の派遣団の皆様には、様々なお話もいただきながら大変お世話になったこと、深く感謝申し上げます。

さて、私がこのドイツ研修視察に参加するにあたり、2つの強い「思い」があった。

1つ目は、「ドイツの地域スポーツクラブを見て地元スポーツ行政はどうあるべきか」である。このことは私の大きな課題であり、また、数年後に定年を控えた私にとっては、緊急にまとめておきたいことであった。

私の答えとしては、究極の助長（力を添えて成長・発展を助けること）行政を進めることだと感じとった。未だ地元スポーツクラブ自体は発展途上の状況であるが、自主自立できるスポーツクラブになるよう、質の高い支援をしていくことが必要と思う。質の高い支援というものは、決してお金だけの支援ではないということ、行政が縁の下の力持ちとしてぶれずに見守り続ける存在であることだと感じた。

2つ目は、夢かも知れないが、「地元兵庫のクラブ関係者の皆さんに、本物（ドイツ）の地域スポーツクラブを見せたいこと」である。ドイツのスポーツクラブを見ることは兵庫のクラブ経営（運営）にきっとプラスになり、地元スポーツクラブの変革（改革）に貢献できるのではないかと考えていた。当然、視察には資金もいることなので、スポンサーを見つけ企画できればと思っている。



偉大なスポーツ先進国 「ドイツ」に学ぶ

私自身がドイツに行くのは4回目で、過去3回は1986年（昭和61年）、1989年（平成元年：ベルリンの壁崩壊直前）、2008年（平成20年）、いずれも公益財団法人ユーハイム体育・スポーツ振興会が派遣する研修視察で、それぞれが「感動するすばらしいドイツ」であった。

今回は、公益財団法人日本体育協会の「クラブマネジメント指導者海外研修事業」の日本派遣団員として参加させていただいた。地域スポーツクラブの経営（運営）を真剣に考えておられる心温かいメンバーと行けたことを、大変誇りに思っている。この経験を生かし、今後は地元にいかに関与するかが私の使命であると考えている。

1986年の1回目の研修成果として、我が国の生涯スポーツ推進のモデルともなった「第2の道（競技スポーツと対比して生活スポーツを積極的にすすめていく）」や「ゴールドプラン（スポーツ施設整備プラン）」や青少年健全育成の中核的なものとして、「スポーツユエグント（日本ではスポーツ少年団を指す）」を学びとった。

1989年（この年11月のベルリンの壁崩壊は有名

な史実)の2回目の研修成果としては、スポーツのほとんどすべてを掌握する「西ドイツスポーツ連盟(フランクフルト)」のリーダー的存在を学んだことであった。スポーツ行政は「連盟」や「クラブ」の行うスポーツ推進の支援が主な仕事であり、むしろその脇役として、いわゆる「助長行政」を順守していた。また、世界のスポーツ指導者が勉強(留学)にやってくる「ケルンスポーツ大学」の存在は、いろんな新しい情報を国内外に提供・発信するものであった。その他として、ベルリンのスポーツクラブ管理者養成学校(ベルリン:現在、日体協公認クラブマネジャー養成講習会のようなもので、コーチ・指導員の養成ではなくクラブ経営者の養成)の存在で、この頃に「クラブマネジメント」について学べたことは、私にとって後の地域スポーツクラブの育成にたいへん役に立った。

2008年の3回目の研修では、旧東ドイツのライプツィヒ大学での競技スポーツ科学・国際集中講座に参加し、「一貫性指導」「タレント発掘」「コーディネーション能力」など、最新のスポーツ科学を学んだ。ライプツィヒ大学は、かつては世界のスポーツ大国であった東ドイツのスポーツの中心であり、1949年から統一される1990年まで存在した社会主義国家のもとに研究を行った大学である。東ドイツは人口1,700万人あまりで、日本の5分の1程度の人口規模だったが、他国に真似できないほどの強化システムを構築し、1988年ソウル五輪では、アメリカを抑えてメダル獲得世界第2位となった。人口比を考えると輝かしい成績である。まさに、自国が優れていることを世界中にアピールするために、国を挙げてのスポーツ強化政策をすすめた国と言える。国際集中講座に参加できたことは東ドイツのスポーツ事業を学び、研鑽する絶好のチャンスとなった。

4回目となる今回のスポーツクラブ視察研修では、様々なことを学び、考えさせられた。なぜなら、ドイツの地域スポーツクラブ経営(運営)が、いつも良い時ばかりではなく、現在はヨーロッパ(ユーロ圏)の財政危機に伴う「クラブ経営危機」がやって来ていることを知った。従前なら、行政(州、郡、市)やスポンサー(企業等)の支援や

制度的にも問題なかったが、今後のクラブ経営には支障が出るようである。今後の方向性として、「自主自立」の経営と質の高いマネジネントが要求されることとなるだろう。このことは、日本における総合型地域スポーツクラブ経営の共通課題とも言える。いずれにしろ、クラブ経営は「自助」を目指し、「共助」と「公助」をどう生かすかが大切な課題になると感じた。

学んだことを実践するための提案として

- (1) 日本の一部では「水とスポーツはタダ」という神話があるが、それを打破するため、スポーツ文化の価値を高めることで、受益者負担(自助キャンペーンが必要)の確立を進めていく。
- (2) ドイツも日本も超高齢社会時代を迎えている。これからも何十年とこの状態は続くであろう。このことから、既に進めているクラブもあるが、全国のクラブの使命ともなり、クラブの質を上げていくためにも、中・高・老年期の健康志向コース(プログラム)の開設の実現が必要だと思う。例えば、地元の市町健康増進課、老人クラブ連合会、病院や企業等と地域スポーツクラブが連携・協働する事業である。また、充実したプログラムには、有資格者(健康運動指導士や中高老年期運動指導士、スポーツプログラマー等)の育成もしくは確保が大切であろう。課題を一步一步解消し、現実のものにして行きたい。
- (3) 小・中学校の体育授業や運動部活動の質を上げるため、また現在の子どもの課題である「体力低下」の歯止めや「運動不足」解消のため、地域スポーツクラブから派遣された外部指導者(ジュニアスポーツ指導員などの有資格者)がその担い手になるよう期待したい。(学校体育システムの規制緩和も含め)
- (4) 上記(2)(3)で触れている有資格者養成について、行政が受講料などを公費負担する仕組みをつくることである。予算の限界もあり、誰でもとは言えないだろうが、地域社会に貢献する条件を付して進めてみてはどうかと思う。私の地元では「スポーツ活動助成金制度」を活用して、実

績を積み上げる試みを行っているところである。
(5) 最後に、「政治」がもっとスポーツ政策に積極的に関わってほしいとお願いしたい。ドイツでは「スポーツ政策」について、政治的に真剣に取り組まれているようである。日本でも国レベルで超党派の「スポーツ議員連盟」があり、スポーツ推進に尽力されている。このようなシステムを地方（都道府県や市町村）においても、超党派での組織を結成され、積極的な提案や支援をしてほしいものである。スポーツを推進して反対する方はいないと思う。

特に、現在のコミュニティが希薄になりつつあ

る社会の中では、様々な課題・問題が山積みであるが、総合型地域スポーツクラブはそれらの問題を解決していける大きな存在となっていくと考えられる。スポーツは、地域・社会を明るくさせる「魔法の力」を持っているだろう。

どうかお願いします。「スポーツ政策」や「スポーツ行政」を端に置かず、真ん中に置いた重要なものにしていただきたい。これらの願いが現実になるよう祈念し、強い気持ちを持って筆を置きたいと思います。

表田 実典

柵原星の里スポレク倶楽部
代表

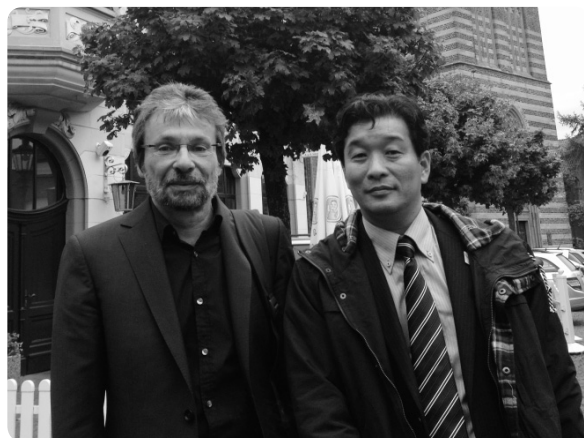
はじめに

総合型地域スポーツクラブに携わる中で、クラブをマネジメントするための「資格」があることを知り、公認アシスタントマネジャーの講習を受講している際に講師の先生からヨーロッパのクラブのビデオを見せてもらった。今でもその時のことを鮮明に覚えている。「なんて素晴らしいのか！」—自分の気持ちの中に強く響き、刺激となった。日本にはこんなクラブがあるのか？こんなクラブが作れるのか？理想と現実と夢がいつも頭の片隅にあった。もしチャンスがあれば1度、自分の目で見て触れたいと思っていた。

数年が経過し、県のクラブ育成アドバイザーさんからは何回か「ドイツ行き考えてみませんか？」と声をかけてもらっていたが、「時間がない」「会社の休暇が取れない」そんな理由でいつも断っていた。しかし、今年は自ら「行きたい！」「自分の目で見たい！」と思った。その背景には、クラブや全国の仲間と接している中で、先進国のドイツに触れ総合型地域スポーツクラブの原点を発見し、近い将来のニッポンのクラブの進むべき姿のヒントにしたい気持ちになったことであった。あの講習会で見せてもらったビデオが思い出され、「夢を実現するには」の想いが強くなったのだ。

ある夏の暑い日、一通の封書が届き開封すると「内定」と記載されおり、思わずガッツポーズが出たと同時に、研修に行かせてもらう責務を感じた。また、事前研修の案内も添えてあり実感がわいてきた。

そして、カタコトのドイツ語(単語)を頭に入れていかなければの思いはあったが結局覚えられないまま、興奮を隠し渡航した。



事前研修や当日の様子

事前研修会2日間(9月3日・4日)で行動を共にする仲間と初めて会った。皆さんが素晴らしく情熱を持っている人達ばかりであった。山本理人講師の講義も中身が濃く解りやすく受けられた。また、全員が同じホテルに泊まり情報交換会で更に接近することができた。23年度派遣団の伊端団長と若藤団員から詳しくお話が聞けたことに感謝する。

10月15日には、最終打ち合わせと荷物確認、そして結団式と壮行会が行われた。一人一人が力強くドイツに向けての決意を述べた。その後、成田空港近くのホテルへ移動。渡航当日(10月16日)は、久しぶりの緊張するチェックインカウンターを無事に通り、出国手続きを済ませ搭乗。空の旅は長く感じたが、私にとって色々なことを考えるには絶好のチャンスであった。ヘルシンキ経由でデュッセルドルフへ到着した。

研修を通じて

今回の自分の研修テーマとして、ドイツのスポーツクラブの歴史や近隣クラブとの接点、ボラ

ンティア活動やクラブハウスの状況、地域性などを肌で感じて帰りたいと決めていた。

歴史に関しては100年以上続くクラブが多く、その背景にはやはり「地域と人」を強く感じた。集える場所や仲間がそこに居るから色々なことを共有したり助け合ったりすることなどにより、今があると感じた。また移民を受け入れる考えやクラブの在り方もしっかりと備わっている。

街を歩いていて日本と全く違うことに遭遇した。横断歩道では、ちゃんと車は停止して歩行者を優先してくれる。逆に停止してくれる車に申し訳なく思った。日本も昔は優先してくれていたが、今は残念だが田舎でもこんな光景を目にすることが無くなった。ドイツ人の人柄や教育理念が理解できたように思えた。

長い歴史の中では継続することが困難となるクラブもある。リーダーとなるような後継者の不足やその他の理由から、近隣クラブが協議し合併の道を歩む形となるクラブもあるようだが、今の日本ではクラブ規模が小さくなくても継続することを優先されるので直ぐに合併とは考えられない。合併するにあたりクラブ間での協議期間が最低1～2年は必要かと思ひ質問すると、約半年で協議は終わり合併が可能になるとのこと—これには正直、驚いた。幾度となく内容の濃い協議を行っているのだろうと思った。

クラブ視察では印象的だったのが「コルシェンブロイヒシニア世代スポーツクラブ」。ここは、高齢者がクラブ運営を行っており、非常に興味深かった。高齢者が助け合い地域に根ざした活動をされ、毎月朝食会が数回開催されている等、居場所がしっかりと確立している。クラブハウスは憩いの場としても有効活用され、お喋りしたり食事を仲間と作り食べたりと、昔の日本を感じた。また、専門的な医療経験者が実施プログラムの担当をする等、メンタルヘルスのにも充実している様子だった。夜には、このクラブが管理する施設に移動しドイツのボウリング、ケーゲルをクラブの皆さんと一緒に経験をさせてもらった。団員の中ではストライクを連発する方もおり、楽しく時間を過ごすことができた。

「TUSグレーヴェンブロイヒ」も視察した。100

年以上の歴史あるクラブであったが、クラブハウスに入り凄く驚き、あのいつの日か見たビデオと同じ様な理想とする造りに感動した。クラブハウスのすぐ横にはサッカー場があり、またクラブハウス内にはカウンターとビールサーバーも完備されていた。ここでサッカーを大勢の仲間達と共に応援したり熱く語ったりするのだろう。

この研修の内容をしっかりと日本に伝えることが派遣された我々の役目でもあり、日本で起こっているクラブの諸問題についても力を合わせて社会の仕組みを変えるべきだと強く感じた。

これからの活動の方向性について

今回の研修を終え、ドイツを見て感じたことは、日本と大きく異なるのが、国・郡・地域とそれぞれのスポーツ連盟が連携を結び、スポーツクラブの必要性を重視して助成・支援を継続していることであった。共有=共存が構築され、いわゆる国の国策基盤の考え方が日本とは違った。また、クラブを利用する側（会員）も、しっかりクラブや連盟を尊重し大会やボランティア活動に率先して協力している。また、地域コミュニティに対してもクラブの特性を活かしている。一方で、先進国のドイツでも日本と同様に苦しんだり悩んだりしているということであった。少子化や高齢化に対する影響や、学校や地域との連携、競技力の強化など、多くの悩みを抱えていた。

私は、ドイツで見てきたことを多くの方に発信・啓発し、日本の総合型地域スポーツクラブの素晴らしさも伝えること、それが役割であり役目と感じている。今の日本のクラブを考えると不安定要素も隠しきれないが、将来、クラブが重要で必要不可欠と誰からも言ってもらえる、そんなニッポンであってほしいし、目指したい。

やはり、最終的には総合型地域スポーツクラブは、「人と人」「心と情熱」が必要であると強く感じている。地域と地域を繋ぐエリアマネジメントや仲間を思いやりヒューマンネットワークの和を更に展開させ、自分自身のクラブライフをエンジョイしたい。ドイツが育んできた100年の歴史をニッポンでも実現させ、後世に残せるよう貢献

に努めたい。

最後に

全国各地から集結した団員の皆さんに感謝申し上げます。今回の研修では大変お世話になりました。この素晴らしい仲間と更に親睦を深め末永くお付き合いをお願いしたく存じます。悩んだり、苦しかったり、嬉しかったり、そんな時にお声をかけさせていただきます。これからも益々のご活躍をお祈り致します。

Danke, es führte jetzt aus GOOD LUCK!!

森 夏枝

西条中央スポーツクラブ
アシスタントマネジャー・スポーツプログラマー

はじめに

西条中央スポーツクラブは、2006年2月に立ち上がった愛媛県西条市で活動しているクラブであり、現在の会員数は約330名である。高齢者を対象としたストレッチや筋力アップのトレーニングの教室、太極拳教室、少年少女サッカーからシニアサッカー、フットサルなどを中心とした多世代が交流できるクラブである。年に数回、スポーツだけでなく文化的なイベントも開催している。また新しい取り組みとして、平成24年度からサッカー教室の子どもたちにネイティブの先生による英会話教室も実施している。

私は小学校から高校までにサッカー、ハードル、ソフトテニス、柔道などの競技を経験した。鹿屋体育大学時代には上海体育大学へ交換留学した中で太極拳と出会い、現在はクラブで太極拳などの指導をしている。大学時代には生涯スポーツ学を専攻し、総合型地域スポーツクラブについても学んだ。ドイツのクラブには以前から大変興味があり、今回が3度目のドイツ訪問であるが、初めて本場のクラブ視察ができることを大変有難く思い、研修に参加させていただいた。

また2017年には愛媛国体があり、西条市はサッカー、ハンドボール、山岳競技、ソフトボール、軟式野球の5つの競技の国体会場となっている。これから愛媛のスポーツを盛り上げていきたいと考えており、ドイツ研修で何かヒントが得られればという思いで参加した。

研修について

日本での事前研修時に、ドイツのクラブがすべて上手くいっているわけではないことを理解した上で、ドイツ研修に参加するようと言われてい



た。ドイツ研修では、8つの講義を受け、5つのクラブ視察をさせていただいた。講義の中で、ドイツにもクラブ運営上の問題がたくさんあること、またドイツの高齢化率は日本に次いで2位であり、高齢化社会に対する問題は日本と同様にあることがわかった。

日本で総合型地域スポーツクラブを運営している中の1人としては、何かドイツから学んで帰り日本の地元地域で活かしたいという思いが強く、クラブ経営の秘訣のようなものを知りたいと思っていたが、上手くいく秘訣のようなものはあまりなく、ドイツも悩んでいるということを知った。

ドイツの財政状況も年々悪化している上に、小学校が半日制から全日制になり、子どものクラブ会員獲得が難しくなっているのが現状のようである。しかし、これらの問題に対してはクラブの指導者が学校に出向いて行き、学校の体育館を利用して指導をするなどの取り組みがされているようだ。また、ドイツでも無償のボランティア指導者を探すが難しい現状があるようで、クラブ運営が年々厳しくなっているようであった。

日本にもクラブの独立、クラブの存続について大きな問題を抱えているクラブが多い。今回よく

勉強になったのが日本のクラブの存続について、ドイツのクラブ運営を学び取り入れることは難しいということである。ドイツと日本のクラブでは成り立ちも違い、教育システムも違うのである。クラブ運営についてはドイツのクラブをそのまま参考にするのは難しいことがわかったが、各クラブには学ぶべきところがたくさんあった。

今回の研修では、特にクラブ視察が大変勉強になった。歴史のある大小様々なクラブを視察させていただいた。どのクラブにもクラブを象徴するロゴやシンボルマークがあった。ペナントや旗、看板など、歴史を感じるものがあり感動した。私たちのクラブはまだロゴが決まっていないので、これから作りたいと思っている。私たちのクラブが何十年か続いたときに、それらが歴史を語るものの1つになることを期待したい。

高齢者を対象としたクラブの「コルシェンブロイヒシニア世代スポーツクラブ」では、毎年12日間の旅行を2回企画し、毎回100名の定員がいっぱいになることを聞いた。私のクラブでも以前に上海ツアーを企画し会員の皆様と本場の太極拳を見に行ったことがあるが、ここ数年ツアーが企画できていなかったのも、また企画をしようと思った。やはり何か目標があるとクラブ会員も健康でいようと頑張れるモチベーションに繋がると思う。コルシェンブロイヒシニア世代スポーツクラブの役員の方々は高齢の方たちだが、大変活き活きとされていた。自分たちのクラブに自信と誇りを持っていらっしやるのが感じられた。

初日の研修が終わり、夕食懇親会のときにケーゲル（ドイツボウリング）を体験させていただいた。普通のボウリングよりも球が小さく、レーンの外側が少し高くなっているのがターが少ない。ケーゲルは高齢者にも優しい、取り組みやすいスポーツだと感じた。しかし、若者も十分楽しめるスポーツでもあった。普通のボウリングでは、ピンを多く倒した方が良いが、ケーゲルはルールによって、ピンを少なく倒すものや多く倒すもの、倒した本数で3ケタの数字を作っていくものなど、様々な楽しみ方があった。またケーゲルではストライクを出すことが難しく、団員の中にはストライクを出すためにかなり真剣に練習してい

た人もいた。新しいスポーツを知ることができて大変勉強になった。

また、「TUSグレーヴェンブロイヒ」というサッカークラブの視察もさせていただいた。歴史のあるクラブで、クラブハウスにバーカウンターがあり、テラスからサッカーの芝グラウンドが見える。私の思い描いていたドイツのクラブという感じであった。私たちのクラブもサッカーを中心としたクラブで、クラブハウスを持つことを目標としているため、参考になる部分が多かった。そして、いつか西条中央スポーツクラブの子どもたちをドイツへ連れて行き、ドイツの子どもたちとサッカーを通じて国際交流ができればと思った。高齢者向けのツアーと合わせ、子どもたちの国際交流ツアーも企画したいと思う。

またドイツ人のおもてなしの心にも感心させられた。どこのクラブを訪ねても大歓迎を受け、私たちの質問にも快く答えてくださった。

今回、訪問させていただいたクラブは昨年度と同じクラブであった。どのクラブもすばらしいクラブであり、私自身としては大変勉強になったが、できるならば来年度以降は、また違うクラブを視察していただきたい。そして、ドイツの様々なクラブの現状を来年度以降の団員の方に報告していただきたいと思う。

また今回の研修で、派遣団員の方々と日本のクラブの現状やクラブの今後について熱く語り合えたことも良かったと思う。

そして、講義とクラブ視察を終え、ケルンの街に移動した。ケルンでは約2時間の自由時間があり、ケルン大聖堂に登ることができた。しかし、私はケルン大聖堂についてリサーチ不足で、まさか509段もの螺旋階段を登らなければならないことを知らなかった。良いトレーニングになり、良い思い出となった。また今回はブンデスリーガのレヴァークーゼンVSマインツ戦を観戦することができた。レヴァークーゼンのユニフォームを着て、ハリセンを打ち鳴らし、団員皆で応援をした。2-2の引き分けであったが、本場のサッカーの試合の雰囲気味わえて、大変有意義な時間を過ごすことができた。

最後に

今回の研修に参加させていただき、日本スポーツ振興センター、日本体育協会の皆様に変感謝いたしております。またアクセル・ベッカー氏を始め、ドイツでお世話になった講師の先生方、クラブの皆様、そして通訳の多田さん、松尾さん、派遣団員の皆様に心から感謝いたしております。

本当にあっという間のドイツ研修でしたが、大変内容の濃い有意義な時間を過ごすことができました。今後の愛媛での活動に活かしたいと思います。

また皆様にお会いできる日を楽しみにいたしております。

本当にありがとうございました。フィーレン・ダンケ！！

尾曲 ともみ

NPO 法人高城スポーツクラブ
事務局長兼クラブマネジャー

ドイツ研修！？

今回4回目ということは、昨年度までに3回あったはずのドイツ研修。昨年度までは、案内文章を見ても右から左へ全く興味がなかったのか？しかし、今回は募集案内を見てなぜか引かかるものがあった。実際にドイツのクラブを見てみたい。外国に行くということは、海外＝外国語、日本語以外話せない（方言交じりで日本人にも通じないことがある！）のに大丈夫なのか？治安は？と不安だらけであったが、理事長より、「行ける時に行って経験することが大事。後悔することのないように」という言葉をいただき、参加することを前向きに考え応募した。

事前研修

初めて会う方ばかりでドキドキしながら参加した。自己紹介の内容を聞くと皆さん凄そうな方ばかりで、「ここに居て大丈夫なのか？一緒について行けるだろうか？」不安がよぎった。高橋団長とご挨拶した際に優しくな方だったので内心ホッとした。しかし、1日目終了後の交流会で、今回の派遣団員の方々への不安も吹き飛んだ。（やっぱり飲みにケーションは大切ですね）

研修内容は、海外研修についてのオリエンテーション、北海道教育大学岩見沢校の山本理人先生より「ドイツのスポーツ振興、スポーツについて」の講義と、前年に参加された先輩方からの講義があり、「100年続くクラブとは…」期待と不安が入り混じりながら、「いよいよドイツに行くのだ」という気持ちになった。



ドイツにて

○いよいよドイツへ

成田を出発してヘルシンキを経由してデュッセルドルフ空港に到着。途中ヘルシンキ空港では、入国審査で何を聞かれているか分からずとても手間取ってしまい。その後手荷物検査場では、ゲートを通過する際に「ピンポン」と音が鳴ってしまい、男性と女性の検査官が2人並んでいたのになぜか男性にボディチェックをされてしまい…ドイツ研修の先行きが不安になってしまった。空港では、アクセル・ベッカー氏と通訳の松尾さんが迎えに来てくださった。

○研修開始

1日目は、ライン・ノイス郡庁舎で、表敬訪問の後、「ライン・ノイス郡のスポーツ」、「スポーツクラブと小学校の連携」について講義、午後はコルシェンブロイヒ市へ移動して「自治体のスポーツ振興」について講義を受けた。クラブ視察は「コルシェンブロイヒシニア世代スポーツクラブ」を訪問し、理事の方よりクラブ紹介の後、意見交換を行った。その中で、心臓系疾患に対するリハビリのためのトレーニングプログラムがある

こと、ヨガやノルディックウォーキング、ハイキングなどの健康志向のプログラムを行っていること、1ヶ月に1回朝食会を開催して交流を図っていること、また安い料金で小旅行も計画されていること等を伺った。その後、場所を移動し、理事の方々とドイツボウリング（ケーゲル）と夕食懇親会を楽しんだ。初めてケーゲルをしたが、「郷に入れば郷に従う」の言葉のように、シニア世代の理事の方に投げ方を教えてもらい、また色々なゲームの方法を聞きながら楽しくケーゲルを楽しむことができた。しかし、レーンやボールの違いがあるためか、かなり真剣に頑張っただけなのにストライクが出なかったことは残念だった。

2日目は、郡庁舎で、「クラブの健康志向コース」「クラブマネジメント」「社会の発展とスポーツ」に関する講義を受けた。クラブ視察は、「TUSグレーヴェンブロイヒ」と「オルケン体操クラブ」の2ヶ所を訪問した。

「TUSグレーヴェンブロイヒ」は、サッカー部門訪問ということであったが、クラブハウスの外に陸上競技場兼サッカー場があり、クラブハウスの2階テラスから練習風景を一望でき、こんな環境が自分のクラブにもあればいいと思った。また、ユースから育成しているという点では、小学校・中学校・高校・社会人と一貫して指導していける体制の必要性を感じ、まずはクラブにどう少年団や部活動を巻き込んでいくのか、方策を検討していきたいと思った。

「オルケン体操クラブ」は、1896年に発足し、100年を超える歴史のあるクラブで、最初に施設を見せていただき、屋内・屋外施設での活動の風景も見た。サッカーコートは人工芝のため天然芝のように活動の制限がないことを聞き、その中で子ども達ものびのびとサッカーの練習に取り組んでいるように見えた。懇親会では、クラブの音楽隊の方々に演奏をしていただき、私たちも鹿児島の下川さんに教えてもらった『おはら節』を披露することになった。オルケン体操クラブの方々も参加していただき、楽しい交流会であった。

3日目は、「TSVバイヤードルマーゲン」にてクラブ視察・講義、「BVヴェックホーフエン」の視察だった。

「TSVバイヤードルマーゲン」は、市の競技スポーツの拠点というだけありスポーツ施設は充実していた。有償のスタッフも多く、バイヤー社との連携もあり、またタレント発掘などの事業も行っており、すごく大きなクラブだと感嘆した。

「BVヴェックホーフエン」は、ライン・ノイス郡スポーツ連盟理事長のクラブでもあったため、色々な質問ができ、参考になった。

クラブ視察では、どのクラブもボランティアスタッフが少ないという課題はあったが、クラブに関わっている人々はクラブのことを考えながら運営し、自分たちのクラブに誇りを持ちとても大事にされていると実感した。クラブハウスの中に写真やトロフィーなどが飾られていてすごく良かった。

最終日は、市内見学とスポーツ観戦だった。スポーツ観戦では、バイ・アリーナでブンデスリーガのレヴァークーゼン対マインツ戦を観戦した。日本のJリーグとは違い、ピッチとの距離が近くすぐ近くでプレーを見ることができ、サポーターも多く熱狂的なファンの席は1ヶ所に指定されていて、際どい判定の時のブーイングは凄かった。私にもわかサポーターになって応援した。「百聞は一見にしかず」である。子ども達にも、日本でプロの試合（サッカーや野球など）を見せに行き、本物の雰囲気を経験させてあげたいと思った。

最後に

今回、クラブマネジメント指導者海外研修に参加でき本当に良かった。五感で得た物があつた。日本がモデルとしているドイツでも課題はあつた。しかし、100年続いているクラブには良さがある。また一緒にドイツに行った高橋団長をはじめ皆さんと交流ができ、話をする中で参考になることがたくさんあつた。今すぐにはできないことでも、少しずつ取り入れていきたい。

クラブ理念の「人づくり、生きがいづくり、健康づくり、仲間づくり、そして活力のあるまちづくり」の土台を作れるよう日々取り組んでいきたいと思った。

今回一緒に参加した方々、宮崎県体育協会の皆

さん、ドイツでお世話になった講師の先生、ケル
ンスポーツ大学のリッター教授、アクセル・ベッ
カー氏、クラブ関係者の方々、通訳の多田さん、
松尾さん、日本体育協会の佐野さんに心から感謝
いたします。

「ありがとうございました」

III

団員レポート

下川 由美子

ひわき YOU 遊スポーツクラブ
クラブマネジャー

はじまり

平成16年3月、私は町内にある図書室で司書として働いており、保育園や幼稚園・小学校を訪れ、本の読み聞かせや読書の楽しさを子どもたちに語るのに楽しみを感じていた頃、上司でもある町教育委員会の社会教育課長から「5月から始まるスポーツクラブでマネジャーとして働いてみないか？」というお話をいただき、青天の霹靂！4月から図書室で働かせてもらおうと思っていた矢先だった。

町でそのような動きがあったことも知らず、「スポーツクラブって？」「マネジャーって何をするの？」から始まり、元々学生時代はずっとソフトテニスに明け暮れ、スポーツ好きな私は「やってみたい」と単純に考えてしまったのだ。これが総合型地域スポーツクラブ（ひわきYOU遊スポーツクラブ）との関わりの始まりだった。

出発

私のクラブは、鹿児島県内では9番目（現在46クラブ）に立ち上がったので早い方だった。県のマネジャー研修会等では必ず、「ドイツは先進地で…」「ドイツに倣って日本のスポーツクラブが創られ…」と講師の先生方からはよく聞いていた。また「ドイツのスポーツクラブには大きなサッカー場や体育館がある」「どのクラブにもクラブハウスがあり、ビールサーバーの付いたカウンターで食事を楽しめるなど会員同士のコミュニケーションの場となっている」とドイツ派遣団員のOBの方々からお話を聞く機会もあり、是非私も実際見て聞いて学びたいという意向に駆られ今回応募したところ、幸運にも団員に決定し、いざドイツへ。



しかし、出発まで事前研修会での講義でいただいた資料や本をしっかりと読み、ドイツ語も少しは勉強してなどと準備万端にと考えてはいたのだが、私が不在中の仕事のお願いや帰国後に計画している行事の準備を早めに片づけたり、バタバタしていたりするうちに出発日前日にやっと荷作りが完了し、次の日からの研修に少し不安を感じながらの出発となってしまった。

ドイツでの研修

デュッセルドルフ空港へは約14時間かかったが少々飛行機酔いしてしまい、到着日の特大ドイツ肉料理に苦勞することになってしまった。

ホテルからライン・ノイス群庁舎まで歩く道のり約15分はとても楽しいものだった。これから始まる初めてのドイツでの研修にワクワクし、また街並みはテレビで見た風景と同じように整然とし歴史を感じる様なオブジェが所々に建てられていた。

講義初日、研修中ずっと帯同していただいたライン・ノイス郡スポーツ相談課のアクセル・ベッカー氏からドイツのスポーツクラブの歴史や現状を聞き、ドイツも高齢化が進み（日本に次いで世界第2位）、人口構成の変化はクラブに大きな変

化をもたらしているということは、日本と状況は同じだと感じた。しかし、ドイツでは法律に「市民にはクラブを創る権利がある」と謳われるなど、基盤がしっかりしており、日本でもこのような考えが必要ではないだろうか。

ドイツでの学校問題は特に興味深かった。2008年からの半日制から全日制への転換を受け、クラブ運営に影響を及ぼし会員確保が重要な課題になっていること、これまでドイツのクラブでは競技力向上の為年少の男性が中心であったが、今では高齢女性の会員が多くなりフィットネスやダンス等女性が好む種目を考える必要が出てきたことなど、スポーツを巡る環境の変化でスポーツのあり方が変化してきていることは、私のクラブでも65歳以上の女性の会員数が35%以上あり圧倒的に多いことでも窺える。

「コルシェンブロイヒシニア世代スポーツクラブ」の視察では、高齢者の方々が本当に楽しそうにクラブを運営されているのが窺えた。プログラムも多種にわたり、小旅行も計画されているのには驚いた。また、医師を招いての心臓系疾患に対するリハビリの運動を実践したり、健康志向のプログラムも提供したりされていた。皆さんで力を合わせクラブづくりがなされており、ほのぼのとした感じが窺えた。視察後はケーゲルを初めて体験し、大いに盛り上がった。

「TUSグレーヴェンブロイヒ」では、まず壁に掛けられたベナントや写真、トロフィーが目をつけた。長い歴史の中で会員に支えられ一体となったクラブづくりが窺えた。また事前研修でも聞いていたようにクラブハウスにビールサーバーが設置されており、スポーツで汗を流した後はビールで喉を潤し、会員同士のコミュニケーションの場になっている様子を窺うことができ、大変羨ましく感じた。私のクラブでもビールを…とはいかないが、クラブハウスは課題とするところでもある。

「TSVバイヤードルマーゲン」は、バイヤー社との連携で壮大な敷地にたくさんの施設が充実していた。資金面でもバイヤー社のサポートを受け、クラブ側は従業員の健康の為にプログラムを提供しており、企業との協力体制が確立していた。また、タレント発掘に力を入れ寄宿舎もあるなど、

子ども達の才能を見出し、育成することもクラブにとって重要になってくることを学んだ。

「オルケン体操クラブ」では、体操場や芝生のサッカー場、トレーニングジムがあり、会員の方々がちょうど柔道の練習をされていた。様々なスポーツを行える環境がきちんと整えられていることが窺えた。また、夕食懇親会ではクラブの音楽チームの演奏を披露していただけるなど、陽気な役員の方々との大変楽しい交流ができた。ここでは鹿児島県の『おはら節』をみんなで踊り、各団員で持ち寄った手拭いのちまきを全員で締めて、楽しいひと時を過ごせた。

ドイツ研修を終えて

実際にドイツの長い歴史の中でのクラブづくりを学び、ボランティア中心の運営で地域の住民が積極的に参加し、自主運営の基盤がしっかりしていることが分かった。このボランティア精神は、私のクラブでも重要な課題となっており、この精神がこれからの私たちにも必要になってくるのだろう。

また、私のクラブでも地域との連携や地域社会に密着したコミュニティとしての役割が重要である。クラブを取り巻く環境の変化や地域住民のニーズに合わせたプログラムづくりが今後求められるだろう。その現状に上手く答えられるようにこのドイツ研修を生かしていきたい。

最後に

研修中、講義・視察とめまぐるしい毎日でしたが、陽気な仲間に囲まれて楽しく終えることができ、団員の方々には大変感謝しています。また、ベッカー氏をはじめ講師の方々、クラブ関係者、最後まで大変お世話になった通訳の多田氏、松尾氏、大きな心で全団員を見守ってくださった高橋団長、いろいろな面で気を配っていただいた日本体育協会の佐野さん、本当にありがとうございました。そして、ドイツ派遣に快く送り出してくださった会長はじめクラブスタッフにも感謝しています。

この研修で学んだこと、経験したことをヒントとして、自分の地域の特性に合わせてクラブに生かしていこうと思う。